色川三中のこと

三田のぶ子

色川家は平維盛の後裔で、はじめ紀伊国牟婁郡色川村に住み、南朝に仕えていた。延元三年北畠親房が義良親王を奉じて東国に下るさい、これに随伴して東下した。

このとき、親王の船は風波にさまたげられて目的地に着かなかったが、親房の船は常陸に漂着して義兵をあげはじめは神宮寺城により、後小田城によって東国経営に着手した。こうして色川氏は小田氏に属することになったが、天正十八年（一五九〇）小田氏が亡びたので、常陸国信太郡小岩田村（土浦市内小岩田町）に移り住み、農業を営み、後に薬商を商い、かたわら醤油を醸造した。

天保時代、色川英幸の代に男の子がなく、谷田部村の今川伝三ェ門の三男を養子とし、その長男として生れたのが三中である。

三中は幼い頃から書を読むのが好きだったが、両親をはじめ親戚はこれをよろこばず、十七才まで江戸の薬種商に奉公に出されていた。しかし、天正末年我が家が火災にかかり、父も病没し家運もひどくおとろえたので、江戸からもどって家業を継ぎ、荷を背負って近郷近在に行商して歩き、ついに家運を復興した。天保年中家産も豊富になったので、弟に本店をゆずり、土浦川口の支店で醤油の醸造、販売に励み、江戸の将軍家の本丸、西丸の醤油御用を命ぜられ、川口河岸から「西丸御用」の旗を立てて江戸に行き来するようになった。この醤油は江戸で、「色川の刺身醤油」としてその上物がもっとも愛好されたという。

この間にあっても、三中は本草学の書、古書、和歌などを好み、図書の購入、その写し取りに多額の金銭を投じ、その蔵書は一万余巻を数えた。たとえば香取古文書六十巻を、自ら香取に行き門人宅に止宿して、六年間もかかって諸家に散在しているのをもれなくもうらし、また中山信名氏の蔵書を買い取り、未定稿を修成して全書（新編常陸国史）を編している。

三中はこれらの蔵書を土屋侯に献上したく思っていたが、果さずして病没し、後湯本武比古のあっせんにより重野安繹博士の紹介で、男爵岩崎弥之助が一括してゆずりうけ、色川文府として保存した。この文府は現在土浦市立図書館に納められている。

このような三中の学識をたよって、多くの門人が遠方よりきたって学び、同地方の神職神官で門に入らぬものはほとんどなかった。そして三中は遠方からの入門者に